

谭晶华 顾问
张厚泉 钱晓波 主编

日语教学 与研究论丛

——日语教育与日本文学

日语教学与研究论丛

——日语教育与日本文学

谭晶华 顾问

张厚泉 钱晓波 主编

复旦大学出版社

图书在版编目(CIP)数据

日语教学与研究论丛 / 张厚泉等主编. —上海: 复旦大学出版社, 2009. 9

ISBN 978-7-309-06828-3

I. 日… II. 张… III. ①日语—教学研究—文集②古典文学—文学研究—日本—文集③近代文学—文学研究—日本—文集 IV. H369—53 I313.06—53

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2009)第 141002 号

日语教学与研究论丛

张厚泉 钱晓波 主编

出版发行 **复旦大学出版社** 上海市国权路 579 号 邮编: 200433
86-21-65642857(门市零售)
86-21-65100562(团体订购) 86-21-65109143(外埠邮购)
fupnet@fudanpress.com <http://www.fudanpress.com>

责任编辑 黄昌朝

出品人 贺圣遂

印	刷	句容市排印厂
开	本	787×1092 1/16
印	张	17
字	数	415 千
版	次	2009 年 9 月第一版第一次印刷

书	号	ISBN 978 - 7 - 309 - 06828 - 3 / H • 1369
定	价	30.00 元

如有印装质量问题, 请向复旦大学出版社发行部调换。

版权所有 侵权必究

编委会名录

顾 问

谭晶华

主 编

张厚泉 钱晓波

编委(按姓氏笔画排列)

王 蕾 张厚泉 *劳轶琛 殷 耀 钱晓波

韩小龙(*编委秘书)

审稿委员(按姓氏笔画排列)

皮细庚 朱卫红 许慈惠 阪田雪子

杜 勤 吴 侃 张厚泉 陆留弟 国松昭

庞志春 侯 锐 钱晓波 高 宁 韩小龙

蔡敦达 谭晶华

前 言

2007年10月26日,东华大学迎来了日本著名的日语教育家、原东京外国语大学日本语学科主任教授阪田雪子先生和东京外国语大学名誉教授国松昭先生。

阪田雪子教授和国松昭教授不仅是日本著名的学者,也是闻名中国日语界的学者。改革开放伊始,正值中日两国缔结友好和平条约之际,阪田雪子教授即以团长的身份,携日本政府派遣的日语教学专家代表团赴北京大学为来自全国各大学的52名日语骨干教师开设“日语教学培训班”,进行了为期两个月的集中讲学。之后,两位教授不仅作为“大平班”的日本专家继续来华讲学,为培养中国的日语教师做出了重要的贡献,在本国的东京外国语大学等日本高等学府培养了大批来自中国的公费和自费留学生。昔日的孜孜门生,如今大多已成为中国日语界的栋梁,活跃在中国高等院校的各个岗位上。此次两位名师联袂而至上海讲学,江浙沪四十多所高校的七十多名教师汇聚一堂,聆听演讲并参加了讨论,许多青年教师还有幸得到了两位名师的直接点拨。

为纪念阪田雪子教授和国松昭教授的联袂讲学,我们组织编写了这本以日语教学和日本文学为主题的论文集。论文集选录了通过盲审评议的33篇论文。

在编辑和审稿过程中,我们得到了本书顾问、教育部大学外语专业教学指导委员会副主任兼日语委员会主任、上海外国语大学常务副校长谭晶华教授的热情指导,各位审稿委员和编委对投稿论文进行了仔细的评审并提出了十分中肯的盲审修改意见。同时特别感谢阪田雪子教授、国松昭教授、谭晶华教授、杨诒人教授、皮细庚教授、许慈惠教授、唐磊教授的特别赐稿和各位作者的惠稿,在此谨代表编委会表示衷心的感谢。

张厚泉

2009年8月1日

目 录

日本語教科書の課題と提言	阪田雪子	1
志賀直哉の人と文学		
——日本近代文学の基軸	国松昭	8
全国大学日本語専攻統一試験の四級/八級作文における問題について		
.....	譚晶华 杨沁人	21
表現形式から見る現代日本語敬語の変化	皮细庚	31
论教材的语法句型解释	许慈惠	41
中国における教育課程政策の動向と日本語教育		
——教わることから自ら学ぶことへ	唐 磊	45
「文学」の揺れ——LiteratureとRhetoricの間で		
——西周の『百学连环』を中心に	张厚泉	56
实例分析「寝そべる・寝転がる・寝転ぶ」在用法上的区别	陆静华	65
肯定文と否定文における「あまり」の研究	葛金龙	72
日语对话中的自称词和对称词	魏高修	79
浅议日语感情形容词的用法特点	王 蕾	83
日本語表現の主観意図について	朴惠英	91
過程構成体系にみられる二種類の意味構築	惠 婷	98
日本語の引用方式の分類及び識別	陈 红	107
福沢諭吉と明治初期の言語ナショナリズム	孙攀河	118
日本における文字表記改革		
——近代化と文字ナショナリズム	田村光博	127
教材作成における熟練教師の隠された知恵		
——初級教材における「から」「まで」の扱いの問題点から	作田奈苗	133
中国の大学における聴解力向上のための一つの試み		
——聴解の教材開発を通して	劳轶琛	140

日本語専門教育における日本語能力試験の位置づけ

- 職業技術学院の日本語教育を中心に 仇宝华 147
- 论日语模拟导游课教学活动 王宝珍 153
- 場力を活かした日本語教育 小柴裕子 161
- 上海の近代化に対する二つの思考
- 谷崎潤一郎と芥川龍之介を中心に 钱晓波 167
- 泷泽马琴的《八犬传》与明治维新 韩小龙 176
- 岛崎藤村の自然観 刘晓芳 182
- 誤解による物語
- 『三四郎』論 张雅君 190
- 论《过了春分时节》的近代主体观念
- 基于叙事学的视角 郑礼琼 199
- 現代文学への模索
- 新感覚派の旗手横光利一を中心として 李 巍 208
- 青春幻想的恋情
- 《伊豆的舞女》简析 吴金明 218
- 《山月记》的变形研究 袁 谧 222
- 『枕草子』と朗詠 李晓梅 227
- 「王昭君」と試帖詩 李宇玲 236
- 从《伊豆的舞女》和《雪国》看川端康成前期作品的创作特点 黄 霞 248
- 对利己主义的拷问
- 试析野间宏的《脸上的红月亮》 苗 苗 255

日本語教科書の課題と提言

阪田雪子

私が最初に上海に参りましたのは1978年、ずいぶん昔のこと、それ以来その機会もなく、本日に至りました。1978年というのは、覚えていらっしゃるでしょうか。中日(日中)平和条約が締結した年です。私は7月下旬から9月中旬まで北京大学で「日本語教育培训班」と称して中国各地の大学から選ばれた52名の現役の先生方に日本語教育の教授法などの講義をしました。当時は外務省の外郭団体(現在は社団法人)の国際交流基金が橋渡しになったわけですが、まだ、平和条約の結ばれる前の日本出発でしたから、外務省に呼ばれ、心して事に当たるようにという注意を受けました。その時は男性の先生二人と私の三人で、年長の私が団長ということにさせられてしまったのですが、北京に着いた時、日本も戦後は変わったものだ、女性が団長だと珍しがられました。研修生の先生方は平均年齢43.5歳で、日本語力により甲班25名、乙班25名の2組に分けられていました。甲班には、日本の大学を卒業した方、台湾出身で東大卒の方、日本の高校を卒業した方など、日本語力は日本人とかわらない方たちでした。ただ、日本語ができて教えるということは別で、文法の質問にはいつも日本語の言い方なんだから、覚えろと言ったので、習慣先生というあだ名を付けられたと笑っていらっしゃった、私と同じ年だった先生もおられました。上海出身の先生は甲班に4名、乙班に3名です。上海外語の周明さんも亡くなられてしまい、積年の感があります。その培训班が終わって、北京大学の先生の案内で、南京から上海へと旅行しました。まだ、街には何もなくて、ただ、上海からの研修生に再会できたことはいちばん嬉しいことでした。

あれから30年、日本でもいわゆる国語学から日本語学として、現代語の研究が盛んに行われるようになりました。国立国語研究所の名前は変わりませんでしたが、国語学会は日本語学会になりました。

日本における日本語教育も戦後の再開から半世紀がたちました。日本語教育学会が発足したのは1962年ですが、当時は、「外国人のための日本語教育学会」と名づけられていました。「国語教育」ではなく、「日本語教育」という言葉が一般の日本人には理解できなかったからです。日本語教育で使用される教科書も次第にいろいろ作られてきましたが、初級の教科書に関して言えば、基本的にはどんな文型をどのように提出し、どんな語彙によって練習させるかという点では一致していると思います。そうは言っても私が日本語教育を始めた1952年ころは、1935年創立で外国人留学生を受け入れ、大学進学前の日本語(理科系進学の学生には理科系の学科も含む)の授業を行っていた「国際学友会」(現在の名称は「日本学生支援東京日本語教育センター」と)と宣教師を対象にした長沼直

兄校長の「東京日本語学校」しかありませんでした。私の日本語教育は留学生を対象とする「国際学友会 日本語学校」で、まず教科書作りから始まりました。勿論、何冊かの焼け残った戦前の教科書はありましたが、内容的にも、また仮名遣いの点でも、そのままでは使えるものではありませんでした。

「文型指導」ということは、戦前から行われていたことですが、「AはBです」の名詞文の文型のA,Bそれぞれにどんな名詞を入れるかがまず問題になります。

今回ご紹介する『総合日語』は中国の先生がたと共同の仕事だったので、私自身にも新しい発見があり、特に、従来の教科書とはかなり異なる角度から、「日本人が話す自然な日本語」というものを念頭において作成することができました。ちなみに、長沼の教科書は、「これは何ですか」「それは本です」、国際学友会は「あなたはどなたですか。」「わたしはラナです。」今、みなさんだったら、どちらがいいかすぐ、お分かりになるでしょう。日本語を習う学生が増え、教師の養成が必要になってきたころ、文部省の国語課で日本語教師養成の研修会が行われたのですが、その時の講師として浅野鶴子先生(長沼先生の片腕)と私が同じ日に当たり、廊下を通る際にたまたま聞こえてきたのですが、「第1課の文型で、「あなたはだれ(どなた)ですか」から始まる教科書があるけれど、すぐ使える文型としては「これは何ですか。」のほうがいい。なぜなら、「これは何ですか」は買い物をする時にも、すぐ使える、街で、知らない人にいきなりあなたはだれですかと聞いたら、どんな顔をされるでしょう。」という説明に私は即座にとんでもない、と思いました。確かにものの名前をふやすためにはいいかもしれませんが、しかし、コ・ソ・アの使い方は決してやさしいものではありません。ずっとあとで、長沼の日本語学校で教えていた方から聞いたのですが、小包を出しに郵便局に行って、局員にそれは何ですかと聞かれて、習ったばかりの日本語で、得意になって「小包です」と答えて局員に笑われたという話です。

戦後、英語教育でブースでの聴解練習が盛んになりましたが、最初の頃は、現在のような立派な視聴覚教室ではなく、大きな教室で中央から聞こえてくる質問文をイヤホンで聞いて、各自がそれに答えるという練習用のものでした。留学生に日本語教育もしているある大学で作られた教材に、「それは何ですか?」の質問に対し「センセイ」というキューが出ていました。機械的な練習では「それは先生です」になってしまいます。(写真を見ながらなら、言えるかもしれませんが)この段階での練習なら、物を指し示す場合に限らなければなりません。

場面抜きでの、いわゆる文型練習だけではいくら教室で絵や写真などを持っていったとしても、日本語の構造は理解させることはできるでしょうが、「日本語らしさ」を教えることはできません。「日本語らしさ」とは何か、これは何も日本語に限ったことではありませんが、言葉を習う場合にはその言葉を成り立たせているその国の文化を理解することが必要なことは勿論ですが、従来の教科書ではその点がまだ十分ではなかったと反省させられます。

『総合日語』の編集で目指した日本語らしさ

第1冊(2004.5) 第2冊(2005.1)

第3冊(2005.8) 第4冊(2006.8)完成

(対象は中国の大学での日本語専攻の1・2年生)

今回ご紹介する『総合日語』は中国の先生がたと共同の仕事だったために、私自身にも新しい発見があり、特に、従来の教科書とはかなり異なる角度から「日本人が話す自然な日本語」というものを念頭において作成することができました。2006年8月には一応第4冊が刊行され(対象は中国の大学での日本語専攻の1・2年生)、次の年の9月には『総合日語』改訂版は『中国第十一・五か年企画 国家級教材』に指定されました。現在はさらに改定に向けて、使用していらっしゃる先生方からご意見をいただいているところです。

『総合日語』が目指したのは、まず「自然な日本語の習得」ということでした。対象の学習者が中国の大学で日本語専攻の1・2年生であるということが前提となっているので、1課をそれぞれ3ユニットに分け、1・2を会話、3が読解という形式をとったことが日本語教科書としては新しい試みだと思います。

さらに、第一冊・第二冊は登場人物を中国の大学で日本語を学ぶ中国の男子学生の王と、同じ大学で演劇の研究を志望している日本からの女子留学生の若い男女として設定しその日常の学生生活を描きました。さらに、第三冊・第四冊では第一冊の初めから主人公として登場している王が日本文化の研究のために日本の大学に留学し、他国からの留学生(韓国人・アメリカ人・タイ人など)との交わりの中からいろいろな経験をし、帰国するという通時性・ストーリー性のあるものになっています。

コミュニケーション活動が行われるときには、当然、それを構成する場所・状況・会話は勿論のこと、会話の参加者なども設定されます。

ストーリー性が重視される教材においては確かに映像教材に勝るものはありません。1990年代に制作されたビデオ教材「ヤンさんと日本の人々」はテレビ日本語講座向けにとして国際交流基金の事業として作られました。シナリオは脚本家といっしょに私たち日本語教育専門家でつくりましたが、監督は松竹映画会社の有名な瀬川昌治(せかわ・まさはる)氏が担当して下さったので、藤田弓子や前田吟などの応援出演があり、見ごたえのあるものになりました。

ハワイのテレビ局で放送されたのをはじめとし、アメリカ・カナダで放送されましたが、放送局での時間的制限があり、テレビ放送ではなく、「ビデオで学ぶ日本語」教材として『続ヤンさんと日本の人々』を含め、広く使用されてきました。(実は、一時期、中国でも放送されていました。そんな折、1994年11月に山東大学でシンポジウムが行われ私はその時は『学習目的別日本語教材作成の必要性』についてお話ししました。)

今回は2006年8月に全4冊が完成した中国の大学日本語専攻生(1・2年生)用の日語教科書『総合日語(北京大学出版刊)』の概要をご紹介しますと共に執筆・編集の過程で考察された日本語教科書の課題を指摘し、提言を行いたいと思います。

近年、日本語教科書の編集・刊行が盛んで、その多くが話し言葉や談話構成を重視すると共に「自然な日本語」を目指す傾向にあります。こうした傾向はたいへん望ましいことです。しかし、一方で、「自然な日本語」とはどのようなものか、それはどのような言語項目として現れるのか、その背後にはどんな言語的原理が働いているのかといった考察は、まだ十分には進んでいないように見受けられます。その結果、ただ「自然な」会話例を教

科書に掲げるところに留まり、自然さを支える言語項目を学習項目として取り上げることも、ましてや、練習することもない状況に留まっています。

言語の自然さを「自然に」習得することが不可能であることは自分自身の外国語学習を思い出すまでもありません。「自然さ」とは、あくまで文生成上の言語的条件を満たすことで得られるはずです。実際、外国人で「自然な日本語」を習得した日本語研究者・学習者も多く、その点でも「自然さ」は日本語母語話者の秘密ではなく、習得可能なものと考えべきです。したがって、教科書は学習者の「自然な」日本語習得に向け、具体的なサポートを目指すべきだと思います。

『総合日語』は「自然な日本語」を念頭において作成された教科書ですが、その過程でどのような工夫をしたか、少し具体的にご紹介しながら今後に向けての提言をしたいと思います。

ストハイフォンではない。ゴシックにするべき性の重視

4冊を通して、主人公(王宇翔=中国人男子学生)とその仲間を中心にストーリーを展開させます。北京の京華大学2年生の王は長春市の出身で、日本語を学んで中日の架け橋になりたいと考えている真面目な、優秀な学生です。ある日、自転車に乗っている時に日本人留学生高橋美穂とぶつかり、二人は知り合います。高橋は演劇学科への進学を希望する可愛い女子学生で、王は一目ぼれしてしまいます。しかし、次の日、王は友人の鈴木から、高橋が鈴木の後輩で、しかも、鈴木のカールフレンドだと聞かされます。しかし徐々に仲良くなった二人は相互学習をしたり他の仲良しの友人たちとコンサートに行ったり喧嘩もしたり、先生方と交流したりして、様々さまざまなことを学びます。その後、王は日本留学の試験に合格、高橋も京華大学の演劇科に合格し、互いに出発を祝い、再会を期するというのが、前半の第1冊・2冊です。後半の第3冊・4冊では日本の東西大学に留学した王はアメリカ人留学生マイクに誘われて、空手部に入部させられたり、茶道体験の際に茶碗を割ったり、また、学校訪問をした中学校で、魯迅について尋ねられたり、先生の家に遊びに行き先生のお母さんや子供の言葉に触れたり、様々な経験をし、日本語だけでなく、人間的にも大きく成長します。すっかり仲良くなった仲間と交流するサイトを立ち上げることを約束し、お別れのスピーチもうまくいって、王は高橋の両親に見送られて帰国します。北京に戻ると、空港には高橋美穂をはじめ、仲良しの友達がみんなて迎えに来てくれていました。

ストーリー性を重視するためには主人公を取り巻く登場人物を一定させ、それぞれの立場、性格なども予め設定しておくことが必要でしょう。『総合日語』ではそれぞれのキャラクターに合わせて似顔絵を描き、特に、ユニット1・2の会話文には、いわゆるスキット代わりになるような挿絵を入れて場を設定しています。

ちなみに、第1課ユニット1の会話のタイトルは「はじめまして」です(プリント参照)。初めて北京の大学を訪ねた日本からの女子学生=高橋が自転車に乗った中国人学生=王(この二人が全冊を通しての主人公)とぶつかり、高橋が「すみません!」と言うと、「あ、日本の方ですか。こちらこそ、すみません。」「ええ、そうです。」「じゃあ、また。」と別かれた次の日、大学構内で日本人学生の鈴木が王に「こちらは高橋美穂さんです。」と自分の後輩

を紹介すると、王は「あ、きのうの方ですね。」と驚く、という会話構成です。「の」の用法が「日本の方」「日本語学科の方」に続いて第1課で「きのうの方」で提出されるというのは、一般の教科書ではまず、見かけないことでしょう。しかし、これがまさに「の」の用法で、自然な日本語の会話になっています。「きのういっしょに見た映画」は「きのうの映画」になり、「今、会った人(方)」は「今の人(方)」になります。

多くの初級教科書で文型練習を行うのに、会話の場というものを抜きに行っていますが、丁寧さと親しさが実際の会話でどのように現れるか、使われるかをストーリーの中で理解させようとしたのがこの教科書の特徴です。

なお、各課はユニット1・2・3に分け、ユニット1・2を会話文、ユニット3を読解文としています。

第1課 はじめまして

王も高橋も「あなたは」「わたしは」とは言っていません。これはいわゆる「主語の省略」ではありません。これは眼前の事件に際して、王も高橋も自分自身及び相手を事件の当事者として把握し、意識を自己に向ける以前に、目に見えたままを言語化しているのです。このように、現場の状況に即して言語化つまり発話にすることが日本語に顕著に見られる特徴であり、この場合の日本語の自然さを支えています。この点が中国語や英語と大きく異なるところでしょ

う。また、自然な日本語を支えているのは「あ、」「ああ」「ええ」という感動詞が用いられていることです。このことは、試しにこれらを抜かして読んでみるとよくわかります。

このように話し手の「気づき」を言語化することによって、ある意味で言葉以上のものを伝達しているのです。例えば、「あ、すみません」の「あ、」は「すみません」と謝らなければならない相手に注意を向けたことを表しています。そこにさらに「あなたは日本の方ですか。」と「あなたは」を入れるとむしろ冗漫になります。次の「ああ」も同様に「あ」を重ねることで「了解・納得」の意味も添加されます。

また、終助詞の使用も重視しなければなりません。普通、最初に提出される終助詞は質問・疑問の意を表す「か」として、従来の教科書では、「これは何ですか。」「あなたはどなたですか。」など質問の形で提出されるのが一般ですが、『総合日語』では、「あ、日本語学科の方ですか。こちらこそ、すみません。」

で始まります。これは質問ではなく、「あ、」は「(気づき)」を表しているのです。そして、質問の「か」は、ユニット2で初めて「ご家族は何人ですか」「この方はどなたですか」など疑問詞と一緒に出しています。(語調が異なることは「音声の解説」で説明しています)。ユニット3は、全課を通して、読解文を提示していますが、第5課では「京華大学紹介」として、学長の挨拶を文字化したものです。

第6課の名詞文でコ・ソ・ア・ドの提出

大学構内を案内してもらっている高橋は「売店はどこですか。」とたずね、案内役の趙さ

んは「売店はあの建物です。」と答えています。(多くの教科書では「駅はどこにありますか」のように存在文で提出していますが、存在することがわかっていて、その場所・位置がわからない場合には、「どこですか」を用いるのが日本語としては、普通です)。

教科書は生きた日本語の文法書であり、生きた辞書でもあります。その意味でも、できる限り、「日本語らしさ」を示していかなければなりません。ある事態の言語化に際して主体が行為を行うという原因を重視した「スル表現」と、事態が出来(しゅったい)し、変化したという結果を重視する「ナル表現」の両方向がありますが、日本語は「ナル表現」を好む傾向があると言われています。第3冊第6課ユニット1の会話では、「割った」と「割れた」の使い分けをテーマとして取り上げています。

王: あ、劉さん、わたしが、あっ! (ガチャーン)

劉: どうでしょう!

王: 割っちゃった!

先生: 「どうしたの、あらあら、割れちゃったのね」

日本人なら、「すみません! これ割ってしまいました。」と言うところを学習者は「すみません! これ割れました。」と言うことが多い。このへんの指導も大切でしょう。

今後の教科書作成に当たっては、まず、目標を具体化する必要があります。すなわち、事態の「主観的把握」を視野に入れた学習項目のシラバスと、学習者が日本語を使う際の「主観的把握」の姿勢の獲得を目指す練習の双方の開発が必要でしょう。『総合日語』ではまだ、学習者に対しての説明・導入・練習などにはこのような主観的把握などの概念が反映されていないという問題を残しており、この点は、今後の大きな課題であると思います。教科書は学習言語と学習者の母語とが接触する最前線です。両者の共同研究が今後ますます必要度を増し、それなしには教科書の開発は不可能であることは疑いの余地がないと思います。

ユニット1

ユニット1 会話

はじめまして

(清晨 7:50。高桥美穗疾歩走在校园里。她约好与铃木见面,眼看就要迟到了,不巧此时又差一点撞上了骑自行车的王宇翔)

王 宇翔: 啊—! (眼看就要撞上了,他一个急刹车停下。道歉) 对不起!

高桥美穗: すみません!

王: (听了她的话) あ、日本の方ですか。(又看了看高桥,简直呆住了)

こちらこそ、すみません。

高桥: ああ、日本語学科の方
ですか。

王: ええ、そうです。

高桥: (嫣然一笑) じゃあ、また。

(王呆呆地目送着高桥)



(次日,在校内,铃木和高桥遇上了王)

鈴木真一: 王さん、おはよう。

王: あ、鈴木さん、おはよう。

鈴木: こちらは高橋美穂さんです。

王: (做惊讶状) あ、きのうの方ですね。

高桥: きんうはどうもすみませんでした。

鈴木: あれ? 知り合いですか。

王: ええ、ちょっと。

鈴木: 高橋さんは高校の後輩で、今、京華大学の語学研修生です。

高桥: はじめまして。あ、「はじめまして」じゃありませんね。高橋美穂です。どうぞよろしく。

王: 王宇翔です。どうぞよろしく。

(王小声问铃木,不让高桥听见)

王: 高橋さんは鈴木さんのカールフレンドですか。

鈴木: ええ、まあ。



志賀直哉の人と文学

——日本近代文学の基軸

国松昭

I 日本文学における志賀直哉の存在

(1) 小説の神様、文章の神様 志賀直哉

① 文学を代表する作家は

ご承知の方が多いかと思いますが、日本のお札(お金)になった文学者は、夏目漱石と樋口一葉です。千円札の漱石が今使われていないのは少々残念ですが、この他にも日本近代文学を代表する文学者は、森鷗外、島崎藤村、永井荷風、谷崎潤一郎、芥川龍之介、川端康成など大勢おります。しかし、彼らの誰もお札にはなっていません。彼らに比べて一般的にはそれほど有名ではない志賀直哉、もちろんなっていません。

しかし、文壇の中では、〈小説の神様〉と言われたのは、漱石でも森鷗外でもなく志賀直哉でありました。では、志賀がどんな作家であったのか、まず志賀の没した1971年10月21日、「朝日新聞」に発表された中村光夫の文章を見てみましょう。なお、志賀の生前中村は志賀に対する鋭い評論で知られていました。

② 中村光夫『生々しい独自の生命観——志賀直哉の文学と思想』より

大正期の作家のうち、作品の量ではなく、その質と後世への影響から見て志賀直哉氏は、もっともゆたかな仕事を残した人でしょう。

昭和が五十年に近い現在でも、氏の強い影響のもとに青春を形成し、それを生涯にわたる、自己の文学の源泉としている作家を、今活躍している人々のなかから、すぐ幾人か数えることができます。

それだけでなく、作風からいって、氏の正反対で、氏とおよそ縁のなさそうな作家が青年時代を氏の作品に対する尊敬と模倣から始めたという人にも、僕はいくらか出会いました。

「志賀文学は現代文学の故郷だ」とすでに戦前、武田麟太郎(たけだ・りんたろう)がいましたが、この気持ちは、今日も多く作家の脳裡に生きているようです。(以下略)

また、志賀は〈文章の神様〉でもありました。多くの文学青年は、志賀の作品を原稿用紙に書き写すことで文章の勉強をしたのです。

③ 私小説中心だった日本近代文学

日本の近代文学は、明治の末あたりの自然主義文学(田山花袋『蒲団』など)を経て

私小説という自分自身の経験(行動や心理)を、想像を交えずそのまま書くという小説が主流になりました。私小説を狭い意味の私小説と心境小説に分けることがあります。私小説は〈破滅型の私小説〉、心境小説〈調和型の私小説〉と言った方が分かりやすいでしょう。私小説の代表の作家は近松秋江、葛西善藏、太宰治です。一方心境小説の代表は尾崎一雄や梶井基次郎が上げられますが、その最も代表的作家が志賀直哉です。

(2) 志賀直哉の略年譜

明 16(1883) 直温(なおはる)・銀の次男として(長男直行は夭折)宮城県石巻(いしのまき)町に生まれる。

明 18(1885) 一家上京(直温が第一銀行を辞職したため)。麴(こうじ)町区の祖父母の家(相馬家の藩邸内)に同居。祖父直道(なおみち)は旧相馬藩士→福島県参事(知事に当たる)→相馬家の家令(家の財産管理や仕事を管理する人)∴自分のことよりも、主君(=主人)の家を大切に思う、武士的な思想の持ち主。

明 22(1889) 学習院初等科入学。

明 28(1895) 学習院中等科進学。母悪阻(つわり)のため死去(夏)。秋に父再婚。義母浩を迎える(母二三歳、直哉一二歳)。

明 31(1898) 四年進級時に落第。

明 33(1900) 夏、書生の末永に誘われて、内村鑑三(うちむら・かんぞう)を訪ね、以後その間に入る。

明 34(1901) 足尾銅山鉍毒問題のことで父と衝突。

明 35(1902) 中等科卒業時に二度目の落第。武者小路実篤(むしゃのこうじ・さねあつ)と同級になる。

明 39(1906) 祖父直道死去。高等科卒業。東京帝国大学英文科に入学。

明 40(1907) 8月、〈自家の女中〉と結婚を決意。家族の猛反対。特に父と衝突。

明 43(1910) 武者小路実篤、正親町公和(おうぎまち・きんかず)、里見敦(さとみ・とん)、柳宗悦(やなぎ・そうえつ)、有島武郎(ありしま・たけお)、有島生馬(ありしま・いくま)らと同人誌「白樺(しらかば)」創刊。大学中退(国文科に移っていた)。

明 45(1912) 父との不和から家を出る。『大津順吉』を「中央公論」に発表。初めて原稿料を貰う(一〇五枚で百円)。尾道(おのみち)にしばし滞在。29歳。

大 2(1913) 8月山手線の電車にはねられ、大怪我→後養生のため城崎(きのさき)温泉にしばし滞在。

大 3(1914) 勘解由小路資承(かでのこうじ・すけこと)の娘康子(さだこ)と結婚。父反対。すすんで志賀家から除籍。我孫子(あびこ)に移る。

大 5(1916) 長女慧子(さとこ)誕生(一生後五六日で死去)。

大 6(1917) 8月父と和解。

昭 46(1971)10・21 死去。

∴ 大正 6 年から一挙に没年の昭和 46 年? (後から説明するつもりです。)

(3) 年譜の中から

- 志賀の家——武士の出身。父の実業界の働きのおかげで、山の手麻布(あざふ)に大邸宅。金銭的にはまったく不自由ない生活。本屋でも高級料理屋でも払いは自宅にツケ。
- 父と直哉——実業界で活躍した父は、明治 45 年には 60 万円の財産家(志賀の日記)になっていました。当時の 60 万円は現在のいくらぐらいかを、後に外語大の学長になった経済史の専門家、長幸男先生に聞いたことがあります。専門家は却って慎重で、「いくら使っても使い切れない大金だ」ということでした。

志賀と父との対立は有名で、あるいはライバル、更には敵というような関係でした。しかし、だからこそ父は志賀の創作の原動力であったのです。

志賀は誰かと対立することによって緊張し、力が湧く、それが志賀の創作の原動力でありました。だから、対立がないと小説を書く勢いが出てこないのです。大正 6 年から昭和 46 年まで飛んでいるのは、6 年に志賀と父親が仲直り、涙の和解を遂げたからです。その後、志賀はほとんど小説らしい小説を書きませんでした(大正から昭和にかけて〈浮気〉体験をもとに、妻との対立を書いた作品がいくつかありますが、志賀の方が弱い立場であったため強い対立感が出るはずありませんでした。)

- 直哉における祖父——志賀は若いとき、キリスト教の牧師、内村鑑三の弟子になったことがあります。その内村鑑三、友人 武者小路実篤とともに、最も尊敬する人物として祖父をあげています。ただし、彼の作品にはあまり祖父は登場していません。
- 母銀に対する直哉——『母の死と新しい母』では、母に死なれた悲しみも描かれていますが、その後間もなく、父の再婚話があった時、祖母から写真を見せられ、「前の母より若くてきれいだ」と、父の再婚に賛成し、その日を心持ちにするようになります。普通の場合子供はどう思うのでしょうか。
- 祖母留女と直哉——父の再婚に対する志賀の反応は、このお婆さんとの関わりが大きいと思います。祖母留女(るめ)は、志賀にはたいへん優しいというか、甘いお婆さんでしたが、まわりの人にとっては、実に怖いお婆さんだったようです。だが、私の考えでは祖母は志賀にとっての祖母というだけでなく、母であり、雷親父(かみなりおやじ)であり、喧嘩(けんか)相手であり、さらに召使であったというべき存在かもしれません。

石巻にいたとき、直哉の兄信行(志賀家の跡取り息子)が、生後間もなく風邪が元で亡くなってしまいました。すると祖母は、お嫁さんに怒り、間もなく直哉が生まれた時、一家が東京に帰ったこともあって、「大事な跡取り息子を死なせてしまうような、不注意な嫁に孫を任せられない。今度は私が面倒をみる」と言って、直哉を母の手から引き離しました。